



大分県産木材の需要が急騰しています。「ウッドショック」が県内にも波及し始めました。

2021年5月29日付
大分合同新聞1面



ヒノキの競りに参加する製材業関係者ら=24日、日田市、撮影・佐藤章史

県産木材の需要急騰

米国の建築ラッシュ余波

大分県産木材の需要が急騰している。米国の住宅建築ラッシュで輸入材が入りにくくなり、国産材も不足する「ウッドショック」が県内にも波及し始めたためだ。新型コロナウイルス感染症拡大の影響などで昨年は低迷していただけに、林業関係者は「活気が戻れば」と期待する。一方、地場住宅メーカーは材料確保が難しくなり、調達費も増加する見通し。「マイナスにしかない」と不安を訴える。

①「ウッドショック」とは？

住宅建築に使用する木材が()し、価格が高騰すること。()の住宅建築ラッシュで発生。

林産振興室によると、主に住宅用のスギ、ヒノキの丸太を扱う県内の原木市場(計16カ所)は、4月の平均売買価格(1立方尺当たり)が1万2126円と前年同月に比べ31・4%(2899円)上がった。2年5カ月ぶりの高値になり、取扱量も11万6381立方尺と10・9%増。5月もそれぞれ4月上回る勢いという。

「山林の所有者には喜ばしい」。日田市森林組合(同市)の代表理事、和田正明さん(61)は歓迎する。昨年の県内原木市場の平均価格は1万2580円に低迷した。2019年の消費増税前であった住宅駆け込み需要の反動減に、感染症拡大と景況の不透明感が追い打ちをかけた。和田さんは「利益はほぼなかった。今回価格が上がったとはいえ、昭和50年代に4万5万円だったのに比べればまだ低い。1万5千円以上で安定してほしい」と望む。

林業関係者は「歓迎」 住宅業者「コスト増」

②県内16カ所の原木市場では、4月の平均売買価格が前年同月に比べ何%上がりましたか。

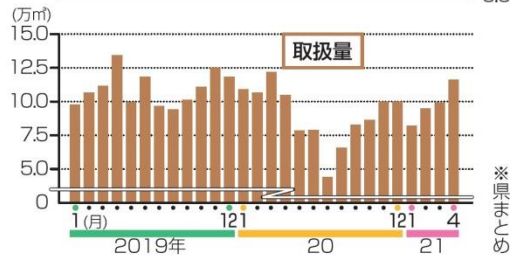
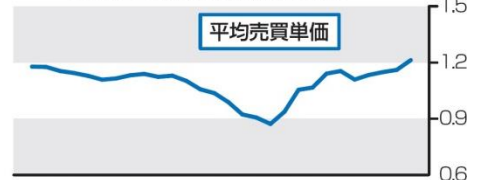
()%

③林業関係者と住宅業者それぞれの思いについて、()に入る言葉を書いてください。

林業関係者：県内原木市場の平均価格が「1万5千円以上で()」

住宅業者(木造住宅メーカー)：「今後は受注しても材料不足で完成の見通しが立たなくなるかもしれない。()」

県内16原木市場の推移



24日に原木の競りがあった日田木材協同組合(同市東有田)。前年に比べ平均6千円増での落札が続く。

地元の製材業者を中心に買手の参加が増えているという。屋根や床に使う合板用を買付けにきた住友林業ファレストサービス大分営業所(大分市都町)は想定以上の値上がりで競り落とせなかった。堺秀友記課長(48)は「採算が合わない。会社は全国を駆け回って求めているが、産地の九州や北海道は高値が顕著だ」と語る。

住宅を建てる業者も頭を抱える。大分市内の木造住宅メーカーが使う木材は輸入6、国産4の割合だ。仕入れ先から8月まで輸入材

は確保できると言われるが、担当者は「保証はない」と不安げに話す。過去の実績に応じた実質的な供給制限を受け、多く購入したくてもできない状態という。本年度中に建築を予定する約30棟は値上がり前の販売価格で契約した。今ところ、材料費の高騰は自社で吸収せざるを得ない。事業担当の50代男性部長は「今後は受注しても材料不足で完成の見通しが立たなくなるかもしれない。お客さんが離れないといいが」と気をもんでいる。

「米国の住宅建設の活況は当面続く観測が出ている。本年度中はこの傾向が続くだろう」とみている。

ウッドショック
感染症が落ち着いたところから米国では郊外に住宅を建てるニーズが急増し、世界的な木材の争奪戦が起きている。日本は米や柱などを使う住宅用の約半分は北米や欧州からの輸入材に頼っており、代わりの国産材を求め動きが活発化している。